



Title	発達の研究と社会的合意のあいだで : 発達研究者はいかにして「養育性の教育」を語るか
Author(s)	川田, 学
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 113, 13-19
Issue Date	2011-08-22
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.113.13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46987
Type	departmental bulletin paper
File Information	113Kawata-1.pdf



発達の研究と社会的合意のあいだで

—— 発達研究者はいかにして「養育性の教育」を語るか ——

川 田 学*

The Difficulties of Studying “Education of Nurture” for Developmentalists

Manabu KAWATA

【要旨】本論では、陳（2011）の問題提起に応答するかたちで、養育性の教育に関するいくつかの論点抽出を試みた。第1に、現代日本が養育性不在の社会であるのか、それとも養育性不全の社会であるのか、その見立てによって取り得る教育的関与の方図が異なることを示唆した。第2に、本論では基本的に養育性不全の立場をとり、その主要な要因としての「乳児へのアクセシビリティ」を抽出した。ヒト乳児は系統発生的にも個体発生的にも、長期にわたる資源投資が不可欠な集団型子育てを必要としており、その基盤として家族を中心としつつも社会成員からの乳児へのアクセシビリティが担保される社会システムが求められる。第3に、児童期から青年期にかけての役割転換の困難性について指摘し、学校教育におけるいくつかのエピソードや実践例、学習指導要領の改訂に伴う今後の展望について論じた。

【キーワード】養育性の教育、社会的合意、発達研究、実践、乳児が見える社会

はじめに

研究室の窓の外で、小鳥たちがせわしなく飛び回っては、ガサゴソとしている。どこから小枝や枯草などを運んできて、卵を温め、ヒナを育むための巣（ニッチ）をこしらえているのだ。ヒナが孵ると、今度はせっせとエサを運ぶのだろう。多くの動物たちにとって、春は子育てにいそしむ季節である。

子育て困難や子ども虐待が連日のように報じられる此岸からみると、親鳥たちの一心不乱の養育行動は眩しくも見える。これを1つのモデルとして、我が身を振り返ることには意味があろう。しかし、これをシステムとして考えるのであれば、私たちと鳥類との子育てにおける自由度の差異を無視するわけにはいかない。親鳥たちは選択に基づいて行動しているのではない。後天的な要素を完全に排除できるかは議論があるにせよ、その行動シーケンスは大方遺伝プログラムやホルモンの作用に従っているだろう。人類が子育てに悩むのは、養育行動の後天的な自由度が高いからであり、このことは、一方で人類の地球規模の繁栄や文化発展を可能にし、他方では子ども虐待ないし適切でない養育（maltreatment）をもたらしている。子育てにおける自由は、人類にとって常に両義的な意味を帯びている。

この小論は、陳省仁氏の問題提起（陳，2011）を受けて、養育性の教育について若干の

* 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 准教授

考察を試みようとするものである。陳は養育性の教育について、実践的な課題意識に基づいて議論しているので、ここでも養育性そのものについてよりも、養育性の教育（可能性）を巡って卑見を示したい。筆者は陳と同じく乳幼児の発達研究を専門としているが、前任校が教員養成系大学であったことから、発達研究と教育・保育実践をつなぐ視点を模索してきた。発達心理学、人類学、民俗学等の観点からの陳の指摘は、乳幼児の発達と保育・子育ての関係に関心をもつ筆者にとって、有益な示唆に富んでいる。陳が提起する養育性（nurturance）という領域は、発達研究としても教育実践としても注目されつつある。ただし、実証研究の蓄積は決して十分でなく、エビデンスに基づく養育性教育論ができるほどジャンルが成熟しているとはいえない。

実証研究が比較的少ない理由として、（１）愛着や共感性、愛他行動など関連する概念との整理が十分浸透していないということ、（２）養育性の定義に対して実践の妥当性の範囲があまりに多様であること、が想像できる。（１）はアカデミズムの事情であって、いま養育性の教育を取り上げようとするときにさして重要ではない。（２）がより本質的であると思われる。なぜなら、養育性の教育を実践するためには、何がどのように教育されるべきかについての社会的合意に関する議論が必要不可欠だからであり、そこには陳が述べるように、文化コミュニティに流布する信念体系が大きく関与している。＜養育性＞について問うことは学問的関心であるが、養育性の教育について議論することは実践的関心である。両者は無関係ではないが、基本的に異なるレイヤーに属する。この２つのレイヤーをつなぐ回路はそれほど太いものではないかもしれない。

陳は、養育性を「相手の心身の発達や状態の改善に必要な態度、知識と身体技術」と定義する。汎用性の高い定義であり、研究を遂行する上では有益である。しかし、養育性の教育を志向するのであれば、学術的な定義とは別に、その社会がいったいどのような態度や知識、身体技術をもって養育性の形成がなされたと判断するのかについての議論が必要となる。すなわち、養育性を現象として理解することと、その価値を判断することとの違いをどう整理するかが、常に我々の課題となっているのだ。一般に、科学者は価値の判断に関与してはならないと言われる。実践から距離を取った思考によって、個人的な利害得失による学問的判断の歪曲を回避するためである。しかし、教育学や心理学に携わる者にとって、価値自由の判断は実際問題として極めて難しく、また、価値自由である発達研究にそもそもどのような社会的意味があるのか、浅学の筆者は常に悩んできた。この点について、まず陳氏のスタンスを伺ってみたい。現象の理解と価値の判断は、どのような論理によって接続可能なのか。

以下では、基本的に上記の問いを含みつつ、我々が養育性の教育を議論するにあたって意識すべきではないかと考える諸点を取り上げる。

養育性不在社会か、養育性不全社会か

陳の問題提起の中心は、日本社会における少子化、子ども虐待、一部の発達障害に関連した子育てにおける困難が、若者の養育性形成を促す文化的システムが変質ないし崩壊しつつあることに起因するとするもので、これを「養育性形成不全仮説」と呼んでいる。確認のため付言すれば、陳がこの仮説で主張しようとしているのは、「若者がきちんと養育性を発達させなくなった」という若者批判ではない。むしろ、かつて日本社会に存在したと

言われる、子どもを神聖な存在として、大切に、また大らかに受容して遇するような、陳が positive childishness と呼ぶメンタリティが、社会全体から消失しつつあることに警鐘を鳴らしているのである。

養育性の教育という問題を考えるとき、養育性の「不在」と「不全」を区別することは重要である。もし、不在が問題化しているのであれば、どこか外部から備給しなければならないが、不全（存在しているがうまく機能してない）であるならば、システムの設計によって作動を健全化できる可能性がある。陳も指摘する中世日本の子宝思想、E.S. モースなどの欧米人が賞賛した日本人の子どもへの接し方や子育ての環境について、筆者も別所でこれを肯定的に論じたことがある（川田，2009）。そこでの問題意識は、人類の乳幼児に備わっている「育てられること」に対する感受性を効果的に活用するという考えたとき、現代の日本社会の環境にどのようなハンディがあるかというものであった。後述するように、人類乳児に認められる特質そのものが、ヒトを人間に変貌させるためのオーガナイザーとして機能していると推測される。筆者の立場は、現代の日本社会でも養育性そのものは潜在的に存在しているが、養育性の作動を抑制するシステムの力学が優位になっていると考えるものである。すなわち、小論は基本的に養育性の（機能）不全という立場をとっている。この点は、おそらく陳と共通する視点であると思われる。

ところで、陳は問題の象徴として、ある大学での次のようなエピソードを取り上げている。入試等の職務がある場合、教職員は早朝から出勤しなければならない。その時、幼い乳児を持つ職員に対しても、公平原則に基づいて職務を課し、その結果職員が幼い乳児を朝6時から保育所に預けるという状況に対して、どの構成員もそれを「おかしいこと」とは思わないという話である。教育についてのオピニオンリーダーとしての責任をもち、子どもや若者の権利の代弁者となるべき大学構成員のあいだで、何の違和感も表明されないまま物言わぬ乳児（とその養育者）の生活がより厳しいものになるという事態を、発達研究者は重く受け止めるなければならないだろう。

数年前、これと似たような思いを抱いたことがある。筆者も所属する主に乳児の発達や教育、医学を専門とする学会での出来事である。会場のフロアの片隅に、2歳くらいの男児と父親がいた。男児は何やらぐずっていた。親子の様子から推測するに、どうやら母親が発表中で不在であり、男児が「ママは、ママは」と母親を求めてぐずっているようであった。おそらく研究者である父親は、声色から苛立っている様子であったが、それを何とかこらえて「ママは、もうすぐ来るよ、だから待てよう」といった声をかけて、のけぞったり大きな声で「ママー!」と呼んだりしてぐずる我が子をなだめようと必死であった。筆者は少し離れたところからその様子に気づいていたが、声をかけようかどうしようかと逡巡しつつ、親子の近くに「乳児研究者」や「子育て支援研究者」がたくさんいるから誰かが声をかけるだろうと思っていた。しかし、何分たっても、親子の目の前にいる何人もの研究者たちは素知らぬ顔をしている。気づいていないわけではないだろう。あれほど見事にぐずって、大きな声で母親を求めているのだ。とはいえ、幼児はずっとぐずっているわけでもなく、父親の声かけで多少気が逸れることもあるので、こういう状況での傍からの声かけはタイミングが難しいものだ。筆者は声をかけるタイミングを計りながら、少しずつ親子に近づいていった。すると、スーッとある中年男性が親子に近づいた。男性は他の学会参加者から見るととてもラフな服装をしており、スポーツタイプのリュックサックに、野球帽という出で立ちで

あった。親子に何やら声をかけると、リュックサックからカエルの玩具を出し、男児の前でシュポシュポと空気袋を手で揉みながら、カエルを跳ねさせてみせた。すると男児の表情が明るくなり、男性から空気袋を受け取ると、自分も同じようにシュポシュポとやって喜んだ。男性は父親に一言二言話しかけると、男児の頭に手をおいて、「あげるよ」と言って立ち去っていった。その後、男児と父親はカエルで遊び、間もなく母親が帰ってきて無事に再会となった。かの男性は、その後のシンポジウムでフロアから質問した時、自分は養護学校の教員だと告げた。

社会の中で養育性がうまく作動しないというとき、その理由にある種の傍観者効果（責任の分散）が機能しているという可能性もある。乳児を対象とする学会だからこそ、皆が「誰かが声をかけるに違いない」と思ったのかもしれない。子ども虐待が起こるたびに、事後になって周囲の住民たちが気づいていながら、「誰かが」と思って行動しなかったという話が持ち上がる。その状況と、上の出来事は構造的には同じものかもしれない。あるいは、陳が挙げた大学の話も、個々人では違和感を覚える者がいても、「そう思っているのは自分だけではないか」との思いが言動を抑制していたのかもしれない。これは社会心理学でいうところの多元的無知（pluralistic ignorance）のメカニズムである。『裸の王様』を褒めそやす大人たちの心境といえ、一般に理解しやすいだろう。台湾出身で、様々な文化における養育や子どもの発達について造詣の深い陳氏から見たとき、日本社会でとりわけ子育てにおける傍観者効果や多元的無知が生じやすいとしたら、それはいかなる理由を想像されるであろうか。

人類の子育て戦略と乳児へのアクセシビリティ

乳児の科学的研究の成果は、人類乳児が高度な認知能力を持ちながら、個体では自らを生存させるための外界作用の行動をほとんど取ることができないという矛盾を示している。この、情報を吸収・分析する能力と、環境に働きかける能力のギャップを埋めるのが、24 時間体制で営まれる養育行動であり、その養育コミュニケーションの基底をなす姿勢や情動の働きである。人類乳児は、自ら能動的に環境に働きかけることよりも、養育者（他者）に特別な注意を向け、観察し、働きかけをしっかりと受ける姿勢・情動機能に長けている。竹下（1999）が指摘するように、他の大型類人猿に比してヒトの乳児が獲得した安定した仰向け姿勢（stable supine posture）が、養育者の養育行動（抱っこ、声かけ、あやし、授乳、食物の供給等）を受けとめるための絶好の姿勢を形成している。現代社会ではとかく＜能動性＞が称揚されるが、人間発達の始原で重要なのは＜受動性＞であるとの認識は、筆者にとって重要な理論仮説である。

一方、行動生態学や社会生物学の観点から、人類の子育てシステムを考えることもできる。一般に、動物の生活史戦略（general life-history strategies）は、母親が同時に産む子の数が多く、子の性的成熟が早く、寿命が短い r 戦略と、出産子数は少なく、子の性的成熟は遅く、寿命が長い K 戦略の2つに分類される（Wilson, 1975 / 1983）。前者では親の子に対する保護的投資が少なく、後者では多い。霊長類は後者の代表例である。人類は少ない子どもに大量の投資を行うことによって、未熟な乳児を保護し、発達を保障してきたのである。投資される資源は食物や身体的な保護等が代表的だが、人類の場合は人的資源（コミュニケーション）の投資

が際立っていると考えられる。集団生活を送る霊長類では、親（母親）以外の個体による養育行動がしばしば認められ、アロマザリング（allomothering）と呼ばれる（根ヶ山・柏木、2010）。中でも、人類は成熟に長期間を要し、かつ多様な人的資源によるアロマザリングを必要とするという意味で特徴的である。

人類が、この特徴的な子育てという営みをプラットフォームにして、家族や集団形成、象徴体系、祭事、社会的諸制度等を発展させてきたという陳の想像は、おそらく妥当なものだろう。しかし、高度成長期以降の日本では、人々の日常生活の中に＜乳児＞が現れることは稀になった。核家族の中では、依然として子どもが生まれればシステムが一変してしまうほどのオーガナイザーであるが、家族を超えた集団に＜乳児＞という存在が開かれる場面は明らかに減っていったと思われる。それは労働や産業の構造変化、自動車等交通量の増大、家屋の構造、そして信念体系としての三歳児神話¹など、乳児をもつ家族を取り巻く外的状況の変動とパラレルである。おそらく、養育性の教育を考える上で最も重要な認識の出発点は、「社会から乳児が見えなくなった」ということではないだろうか。

ここで社会から見えているというのは、単に物理的に見えることを意味するのではない。乳児が、家族以外の人物と具体的な接触と影響関係をもつ可能性に開かれているということであり、他の家族の乳児の生活が自分に関係のある問題として意識の上位に置かれているということである。乳児へのアクセシビリティがある社会と言っても良い。陳が「向う三軒両隣」という言い方で表現したような、高度成長期以前の地域社会は「乳児が見える社会」の1つのモデルである。子育て世代の親と祖父母だけが特権的に乳児にアクセスするのではなく、社会の構成員誰もが乳児へのアクセシビリティを有していれば、学会会場でぐずる子への対応であれ、職務のローテーションに関する意思決定であれ、自治体・国レベルの政策であれ、物言わぬ乳児の代弁者、エージェント（あるいは、これが養育性を備えた人格ということかもしれない）がシステムとして現れてくるのではないか。「乳児が見える社会」は、今後いかにして可能なのか。

役割転換の困難性と子育てについて知りたい若者

若者の養育性形成という問題に絡んで、近年筆者は大学の講義で2つのことを繰り返し経験してきた。1つは、日本社会が若者たちに＜育てられる者＞から＜育てる者＞への転換（鯨岡、2002）を促すしくみを用意できていないこと、1つは、少なくない若者たちが自らの養育性形成を切望していること、である。

前者については、次のような学生たちとのやりとりがある。幼児や児童の発達心理学を教える講義で、筆者は剣玉や独楽などの玩具を持参することがある。児童文化や遊びの変容に

¹ 大日向・莊巖（2005）によると、三歳児神話には3つの要素がある。すなわち、①子どもの成長・発達にとって3歳までの時期が重要である、②その大切な時期の養育には母親が当たるのが最善である、③もし就労等で母親が養育に専従しないならば、子どもは寂しさを感じ、その後の発達に負の影響を与える、である。①については、肯定的な論者が大勢だが、②③については諸外国の大規模な縦断研究からも否定的な結果が得られている。

関する内容の導入に使うことを目的としている場合が多い。まず筆者がいくつかの技を披露してみせると、拍手喝采をもらう（それほど大した芸でないのに、学生たちは優しいものだ）。次に、学生たちに「できる人？」と声をかけると、多くの場合あまり手は挙がらない。何人かの学生は「できるかもしれないけど、自信がない」と言う。そこで、「子どもの頃はできたという人？」ときくと、かなりの割合で手が挙がる。技術レベルの真偽は抜きにしても、少なくとも多くの学生が子どもの頃に伝承遊びを経験して、ある程度の技術を身につけているものと思われる。では、なぜ今はできないのか。単純なことである。長い間やっていないからである。

中高生になっても剣玉や独楽に夢中になれる人は少ないだろう。しかし、こうした遊びは自分が楽しい、自分が夢中になるという理由のほかに、伝承遊びの名が示すように「他者に伝えるために実践する」という側面がある。学生たちは自らが楽しむ子どもとして剣玉や独楽を経験したことはあるが、自分より若い者に教えるため（伝承するため）に経験したことがほとんどないのである。教師なら必ず経験しているように、多くの場合物事は教えられた時よりも、他者に教えたときに定着する。それは、知識や技術がメタ化され、再構造化されるからである。日本社会が若者たちに用意できていないのは、彼らへの文化伝達の間というよりも、文化の伝達者としての役割を演じる場である。玩具等の文化的媒介物を挟んだ、役割の転換システムが弱化しているのだ。ことほどさように、ほとんどの親たちは、我が子を授かったときに突然“本番”の子育てに遭遇することになり、当然ながら右往左往する。

いまひとつ、若者たちの中に自らの養育性形成を切望している者が少なくないというのも偽らざる実感である。大学で乳幼児の発達に関する講義をもつようになって7年目であるが、学生たちに毎年受講理由をたずねている。数値による推移は確認していないが、増えていると感じるのは、乳幼児の発達を学びたい理由として、「将来の親業のため」「大人として小さな子どものことを知っておく必要があるから」と述べるものである。特に近年では巷の“イクメン”ブームを背景にしてか、育児について学びたい男子学生の増加も目立つ。実際に、「この授業は将来の子育てにとって有益だと先輩に教えられて」という男子学生に度々出会う。これは理系・文系を問わない傾向である。

こうした学生の期待を受けて講義をするうち、研究者が乳幼児発達を学問として伝達しようと意図する前に、そもそも乳幼児というものが何処にいて、どういう風に生活しているのか、妊娠から出産までにどのような社会保障システムがあり、乳幼児健診や保育・幼児教育とはどういうものなのか等について、学生たちの予備知識が限りなくゼロに近いということに気がついた。そこで、数年目から筆者は発達の話をする前に、学生自身が子どもを持ったとしたら、子どもと家族の生活がどのように展開していくかをシミュレーションできるような内容を話すようにした。

生活経験の不足が教科の学力低下に結びついているという指摘は義務教育段階だけのことでなく、高等教育においても、生活的概念の貧困なところに学術を施そうとしてもうまくいかない。利口な学生は言語操作とイメージのみで乳幼児の発達を学び、それらしい批判を口にするかもしれないが、むしろ受験教育で刷り込まれてきた「早分り」の癖をこそ、乳幼児の発達と子育ての領域に接することで溶解させることをねらうのである。

学校教育における子育てエージェントの育成

陳は、養育性形成の敏感期であり、かつその年齢人口のほとんどをカバーする学校教育（義務教育課程）に期待を寄せている。多忙を極める学校現場であるが、それでも近年では養育性の教育に関わる取り組みが行われるようになっていく。

例えば、保育所や幼稚園、小学校等で行われている異年齢活動、中学校や高等学校で行われている保育体験や乳幼児ふれあい体験などがある。中高で行われるものは、職場体験の一環として希望者が保育所や幼稚園等での実習を行うものもあれば、学校が地域の NPO と連携して、昼休みなどに乳児とその親が学校にやってきて、そこに生徒たちが集まって共に時間を過ごすといったものもある。

こうした変化は、学習指導要領の改訂にも反映されている。2012 年度（平成 24 年度）実施予定の中学校学習指導要領技術・家庭科の「家庭分野」には、内容の筆頭 A に「家族・家庭と子どもの成長」が置かれた。旧要領の A は「生活の自立と衣食住」であり、B に「家族と家庭生活」があった。新要領では、「子どもの成長」についての学習が明確に位置づけられ、具体的に「幼児の発達と生活の特徴」を知ることや、「幼児と触れ合う」活動も盛り込まれるなど、旧要領よりも子育ての学習に関して踏み込んだ記述がなされている。

およそ戦後高度成長期以降、一貫して学校教育は批判の対象であり続けているが、一方でそれは学校への過剰な期待と依存の裏返しでもある（広田，2005）。近代学校は、地域共同体の弱化と再構築という矛盾した役割を担う装置であるが、依然として人々の関心の的であるには違いない。その意味で、学校（教育）という装置を、現代社会の子育ての資源（K 戦略における投資の一資源）として利用するのは悪くない選択である。ただし、潜在する養育性が作動するためには、学校での座学のみでは不十分である。重要なのは、子どもや若者の潜在的な養育性が十分に発揮可能な役割が提供されることである。そのためには、学校教育を軸としながらも、NPO 等の新しい自治組織と連携することが目下の妥当な選択であると考えられる。「向う三軒両隣」の復活を超えて、新しい環境に適合した「乳児の見える社会」を構築する可能性を探りたい。そのとき、発達心理学者（発達研究者）は、果たしてどのような役割と寄与をなすべきであろうか。

文献

- 陳省仁. (2011). 養育性と教育. 北海道大学教育学部紀要, 113, 1-12.
- 広田照幸. (2005). 教育不信と教育依存の時代. 東京：紀伊国屋書店
- 川田学. (2009). 心理学は子どもをどのように捉えようか. In 心理科学研究会編 小生の生活とこころの発達 (pp.178-188). 東京：福村出版.
- 鯨岡峻. (2002). <育てられる者>から<育てる者>へ：関係発達の視点から. 東京：日本放送出版協会
- 根ヶ山光一・柏木恵子. (2010). ヒトの子育ての進化と文化：アロマザリングの役割を考える. 東京：有斐閣
- 大日向雅美・莊巖舜哉. (2005). 子育ての環境学. 東京：大修館書店
- 竹下秀子. (1999). 心とことばの初期発達：霊長類の比較行動発達学. 東京：東京大学出版会
- Wilson, E.O. (1975). Sociobiology: the new synthesis. Cambridge: Harvard University Press. (Wilson, E.O. (1983). 社会生物学 (伊藤嘉昭, 監訳). 東京：思索社)